

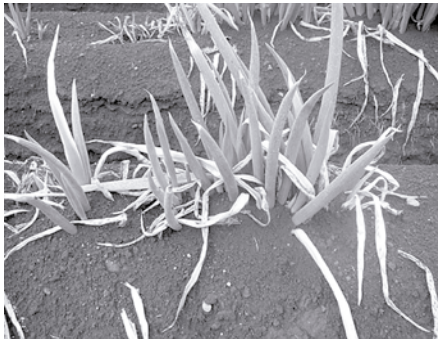


## ねぎの黒腐菌核病の防除

### 1 黒腐菌核病の病徴

感染すると葉先が黄白色になり、下葉から黄変して生育不良となります。次第に上位葉へと進展し、のち株全体が萎ちようとして生育が停止して最終的には枯死します。

被害株は根が腐敗しているため簡単に引き抜け、重症株の根際部は軟化腐敗し、黒色のかさぶた状か、ごま状の



圃場での被害



被害株

黒い菌核が病斑部を包むように形成されます。

### 2 発生条件

病原菌はかびの一種で、菌の生育適温は15～20℃で、25℃以上ではほとんど発病しません。10～11月頃にねぎに感染し、発病は例年2～3月頃から認められ、彼岸頃から発病が多く発病進度も早くなり、4～5月に被害が最も多

くなります。

その後、

気温の上昇に伴って病気の進展は終息しますが、菌核を形成して夏季は休眠状態を経過します。

### 3 防除対策例

- (1) 発病の多いほ場での連作は見合わせ、5～6年程度の輪作を行う。
- (2) 夏～秋季にソルゴー等を導入すると、次作の夏ねぎにおける本病の発生が抑制される。
- (3) 30cm以上の深耕を行う。
- (4) 薬剤（バスマイド微粒剤）による土壌消毒を行う。薬剤処理後、ビニール被覆を1カ月位続け、太陽熱消毒も併用することにより防除効果が高まる。
- (5) 被害残さは発生源となるので、ほ場外に持ち出す。



ビニール被覆

### リビングマルチ情報

ねぎほ場に大麦リビングマルチを導入することで、夏の地温抑制などが期待されています。

は種時期やは種量、ほ場の条件（乾湿）によっても異なりますが、大麦は種後40～50日くらいから黄色い葉が見え徐々に枯れ始まります。



5月15日は種の大麦リビングマルチ  
(7月9日撮影、播種54日後)